

その 13

東国の高橋虫麻呂と 山部赤人



勝鹿の真間の娘が墓に過る時に、山部宿祢赤人が作る歌(并せて短歌)

「古に ありけむ人の 倭文機(しつはた)の 帯解き交(か)へて 廬屋(ふせや)建て 妻問ひしけむ

勝鹿の 真間の手児名が 奥(おく)つ城(き)を こことは聞けど 真木の葉や 茂りたるらむ 松が根や
遠く久しき 言(こと)のみも 名のみも我は 忘れゆましじ」

(このあたりに昔いたという人が、倭文織りの帯を解きかわして伏す、伏屋を作って妻問いたという葛飾の真間の手児名の墓はここだと聞けど、真木の葉が茂っているせいだろうか、松の根が長く延びているように時が永く経ったからであろうか、その墓は見えないが、手児名の話だけでも、名前だけでも、私はいつまでも忘れられないことであろう) 山部赤人(巻3・431)

「我也見つ 人にも告げむ 勝鹿の 真間の手児名が 奥つ城所」

(わたしも見た、人にも話そう。葛飾の真間の手児名の墓所のことを) 山部赤人(巻3・432)

「勝鹿の 真間の入江に うちなびく 玉藻刈りけむ 手児名し思ほゆ」

(葛飾の真間の入江で、波に揺れる玉藻を刈ったという手児名のことが思われる) 同 (巻3・433)

柿本人麻呂と並ぶ、もう1人の歌の聖山部赤人が詠んだ真間の手児奈の歌である。真間とは崖のことで、当時下総国の国府台の崖の近くだったため、それがそのまま地名となった。そして、この国府台下総国府があったことから、国庁を通じて手児奈の名が奈良の都にも伝わったのだろう、この真間の手児奈伝説は、多くの人の心をとらえ広く世に知られるところとなった。赤人もこの言い伝えを聞いて、下総国を訪れた途次、手児奈の墓所を訪ねたが、時が永く経ったせいか、その所在が分からず、奥つ城があったあたりで、手児奈の傍を偲び追悼する挽歌を詠んだのである。虫麻呂と同じく赤人もまた、手児奈の入水やそれに至った理由については触れていない。

しかし、赤人の歌は、ある部分、虫麻呂の歌とは大きく違っていた。赤人は、「帯解き交へて 廬屋(ふせや)建て 妻問ひしけむ」という生々しい表現で、昔男が妻屋を立て、そこで手児奈と互いに帯を解きあって共寝をした、として、手児奈伝説を身も心も清らかなまま身を投げた、単なる乙女伝説としてはとらえていないのである。では、手児奈はなぜ入水したのか？もしかしたら、そんな手児奈が身を投げるに至ったのは、その妻屋で他の男とも共寝をしたためか？そう言えば、その他何人かの男と結婚していたのでは、という説まであるところを見ると、その罪深さに苦しみ、それで自ら命を絶つことになったのか？など等、想像、いや妄想を逞

しくするしかない。それはともあれ、巷間伝えられる乙女伝説とは大きく異なる歌となっているのは確かだ。いずれにしても、この歌からは、叙景歌人として自然の雄渾さを詠っただけではない、赤人の人を見る目のクールさを読みとることができる。このように、虫麻呂と赤人という2人の万葉ファンタジスタが、それぞれの手児奈像を歌に詠んだことで、さらにその名は都に鳴り響いたことだろう。

2人がこの真間を訪れたのは、8世紀前半の天平時代、720～30年代と考えられている。そして、2人が真間を訪れてから10年ほど後、天平7(735)年から始まった古呂奈（コロナ？）ならぬ当時の疫病、鬼病（かみのやまい）が大流行し、全国で100～150万人もの死者がでることになるが、通説では赤人もその時鬼病で亡くなったのでは、とされている。その鬼病の流行がピークになった天平9年には、大仏造立で知られる行基上人がこの地に立ち寄り、手児奈の心情を哀れに思い、「求法寺（ぐほうじ）」という寺を建て手厚く弔った。それが、現在手児奈霊堂の本山である「弘法寺（ぐほうじ）」である。

ところで、鬼病で亡くなったとされる赤人のその後については驚くべき伝承が残されているが、それは後の話。



真間山弘法寺

そこで再び高橋虫麻呂である。虫麻呂は、赤人が手児奈の住む妻屋に男（たち）が妻問いた、と歌に詠んだ伝承は知らなかったのだろうか。そんなはずはない。ファンタジスタ虫麻呂は、そんな手児奈の女の性（さが）を知りながら、世の男たちが好む（私だけではないはず）乙女伝説のファンタジーを詠い上げたのではないのか。先に、虫麻呂はあえて二股をかけたと評したが、その聖なる乙女伝説に対置する形で、その真逆にある珠名伝説を、もう1つのファンタジーとして歌に詠んだ。それぞれの性を強く出すことで、ファンタジーとしての魅力をより強く打ち出したのに違いない。それによって虫麻呂は、男たちが心惹かれる女人の2つの性を詠い上げたのだろう。或いは、1人の女人の中にある2つの性を腑分けして詠ったのだろう。それが、前回ファンタジアとして、2つの歌を1つの物語にまとめた由縁でもあった。そして、そのように推論した手がかりとなる歌が、虫麻呂にはもう1首あったのである。

虫麻呂は、一筋縄ではいかない異色の歌人であるとしばしば書いてきた。それが、万葉ファンタ爺さんと呼ぶ所以でもあるが、このファンタジスタ虫麻呂は、とりわけ異色の歌会の歌を詠っている。妻や夫を交換する歌会、嬬歌会（かがひ）の歌である。それも嬉々として自らも参加し、熱い思いを詠い上げた「絶唱」である。国語辞典を引くと、「絶唱」とは、1、この上なく優れた詩や歌、2、感情をこめ夢中になって歌うこと、と2通りの解釈があるが、私としては、1、と判定する能力はないけれど、2、の意味、思いを込めて夢中になって詠う「絶唱」であることは、私でも保証できる。まずは、このシュールな「筑波嶺に登りて嬬歌会をする日に作る歌」をご覧ください。

「鶯(わし)の住む 筑波の山の 裳羽服津(もはきつ)の その津の上に 率(あとも)ひて 娘子(をとめ)壮士(をとこ)の 行き集ひ かがふ嬬歌会に 人妻に 我也交はらむ 我が妻に 人も言問へ この山を うはく神の 昔より 禁(いさ)めぬ行事(わざ)ぞ 今日のみは めぐしもな見そ 事も咎むな」
(鶯のすむ筑波の山の裳羽服津の、その泉の辺りで、一斉に若い男女が行き集り遊ぶ嬬歌で、人妻とわたしも交わろう。わたしの妻に他人も言い寄るがよい。この山を治める神が、昔からお咎めなさらぬ行事だ。今日だけは、ふびんに思わないでください。咎めてくれるな) 高橋虫麻呂(巻 9・1759)
「男(を)の神に 雲立ち上り しぐれ降り 濡れ通るとも 我帰らめや」
(男神に雲が立ち登って、しぐれが降り濡れ通っても、わたしは帰るものか) 高橋虫麻呂(巻 9・1760)

大らかに性を詠っている。嬬歌会は、この日だけはいわばフリーセックスが認められた男女の歌会である。虫麻呂自らも、「人妻に自分も交はろう」と興奮して詠い、「雨が降っても帰るものか」と意気込むこの歌は、伝説等を詠むことが多かった他の歌とは異なり、異彩を放ってユニーク、異色の歌である。

ただし、異色の「面白さ」は、むしろこれからだ。この歌、実際は虫麻呂さん、嬬歌会には参加していなかったのでは、という万葉学者がいるのだ。つまり、嬬歌会には参加しなかったのだけれど、あたかも参加して、「人妻に交はった」かのように歌を詠んだ。なぜか？……創作だ。言うまでもなく、客観的な事実を伝えるドキュメンタリーより、時にフィクションの方がより真実が伝わることもあるが、虫麻呂プロデューサー(?)はそう判断したのではなかろうか。その万葉学者がなぜ「参加していないかも」と考えたのかは分からないが、同じプロデューサーとして、あえて俗な言い方をさせてもらえば、その方が、「面白い」、そして、「受ける」。いずれにしても、虫麻呂は手ごわい表現者であり、一筋縄ではいかないファンタ爺さんだったことは確かだ。

もしかしたら、これは手児奈の歌にも当てはまるかもしれない。このように性に対して自由で大らかな時代だったからこそ、手児奈のような乙女伝説が珍重され持て囃された。そこで、虫麻呂は乙女伝説に徹して手児奈の歌を詠んだ方が「面白い」、そして、「受ける」と判断した。そのねらいが当たって、手児奈伝説は、いつの世も人々の人気を集め、いま現在も「受けて」いるのだろう。私たちは、1300年前に虫麻呂が仕かけた術中にはまっているのかもしれない……と思うのも、また「面白い」、である。

手児奈や珠名、そしてこの嬬歌会の歌 3 首は、虫麻呂が常陸の役所勤めの間に詠んだ歌だから、ほぼ同時期の歌である。この 3 首は当時の性について詠った 3 点セットの歌として読んだ方が、それぞれの歌の魅力が伝わるのかもしれない。私こと、万葉ファンタ爺さんとしては、前回 2 つの歌に竜宮伝説の要素を加えてファンタジアとしたが、竜宮伝説より、むしろこの嬬歌会の歌の方を取り込み、その 3 つの歌を組み合わせると 1 つの物語にした方が…それももし、虫麻呂が現世に甦って、自ら、それをしてくれたら、どんなにか面白いファンタジアになったことだろう？

虫麻呂は、万葉集に、その多くは高橋虫麻呂歌集から長歌 14 首、短歌 19 首、旋頭歌 1 首、合わせて 34 首が収められている。虫麻呂の歌では、他に畿内に材を取った歌がよく知られているところだが、摂津には、「真間の手児奈」伝説に似た、「菟原処女(うないのをとめ)」伝説を詠った歌(巻 9・1809～11)がある。万葉集巻 9 に、手児奈の歌とセットで、手児奈の次に置かれている。現在の兵庫県の六甲山南麓、葦屋の美女菟原処女が、菟原壮士と血沼(ちぬ)壮士に求婚されて悩み、「卑しい私のために立

派な男たちが争うのを見ると、生きていても結婚などできましようか、黄泉で待ちます」と母に告げ、川に身をなげて死ぬ。そこまでは、手児奈の伝説と同じパターンだが、その後は大きく異なり、2 人の男も自ら後を追って死ぬ、という壮絶な妻争い伝説の歌だ。その墓は、菟原処女の墓を挟んで、2 人の男の墓がその両側にあるという。この歌にも、虫麻呂の他、田辺福麻呂の「過葦屋処女墓時作歌一首」（巻9・1801～2）があり、それらを追和する形で、大伴家持が「追同処女墓歌一首」（巻 9・4211～12）を詠んでいるところも、手児奈のケースに似ている。

その後平安時代にはこの伝説が脚色され「大和物語」に、室町時代初期には観阿弥或いは世阿弥の作と伝えられる謡曲「求塚」に、そして、明治時代の文豪森鷗外は戯曲「生田川」を書いている。いずれにしても、古来人々は、この手の乙女伝説、いわゆる「処女伝説」のファンタジーを好んだ証ではある。



菟原処女塚
(神戸市埋蔵文化センターHPから)

また、虫麻呂の伝説歌人の所以たる最たるもの、現代も浦島太郎伝説として残る「浦島子」（巻 9・1740、41）の歌は、ぜひ目を通しておいていただきたい。前段で「竜宮伝説」と書いた昔話だ。同じ万葉集巻 9 の「珠名」の歌の後に載っている。前述した心理学者による日本人の女性像の分析に使われた「亀姫」は、虫麻呂の浦島子の歌には登場しない。亀も、そして乙姫の名も出てこないで、いきなり「神の乙女」として登場し浦島と結ばれる。そして、心理学者が分析した、「捕らえた男を飲み込み、男は悲劇的な結末を迎える」タイプの女だった「神の乙女」に取り込まれ、浦島は最も悲劇的な最期を迎えるのである。万葉学者は、この虫麻呂の浦島が、その後数多く出てくる浦島伝説の最も原初的なものの 1 つだろうとしている。

そしてもう 1 首、忘れてならないのは、虫麻呂が詠んだ「不尽山（ふじのやま）の歌」だ。万葉の時代の神の山富士と当時の石花（せ）の海を、スケール大きく描いて詠い上げた堂々たる叙事詩である。

不尽の山を詠む歌一首〈并せて短歌〉

「なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ 出で立てる 不尽の高嶺
は 天雲も い行きはばかり 飛ぶ鳥も 飛びも上らず 燃ゆる火を 雪もて消ち 降る雪を 火もて消ち
つつ 言ひも得ず 名付けも知らず くすくも います神かも 石花(せ)の海と 名付けてあるも その山
の つつめる海そ 不尽川と 人の渡るも その山の 水の激(たぎ)ちそ 日本(ひのもと)の 大和の
国の 鎮めとも います神かも 宝とも 成れる山かも 駿河なる 不尽の高嶺は 見れど飽かぬかも」
((なまよみの)甲斐の国と(うち寄する)駿河の国と、両方の国の真ん中から聳え立つ富士の高嶺
は、天雲も進みかね、飛ぶ鳥も飛び上がれない。燃える火を雪で消し、降る雪を火で消し続け、言い

ようも、呼びようもないほど、靈妙にまします神の山ですよ。石花の海と呼んでいるのも、その山の堰きとめた湖ですよ。富士川といって、人が渡る川も、この山の激流なのです。(日本の)大和の国の鎮めとまします神でしょうか。国の宝として造られた山でしょうか。駿河の国の富士の高嶺は見ても飽きない山です)

高橋虫麻呂(巻3・319)

「不尽の嶺(ね)を 高み恐(かしこ)み 天雲も い行きはばかり たなびくものを」

(富士の嶺が高く恐れ多いので、天雲も進みかねてたなびくのです)

高橋虫麻呂(巻3・321)

右の一首は、高橋連虫麻呂が歌の中に出づ。類を以ちてここに載す。

この歌を見ても、当時の富士山は、噴煙を上げ噴火していたことが分かる。神代の昔から活動を続ける永遠の生命の尽きることない山、つまり富士山は、「不尽山」と書いた。また、「石花の海」は、富士山北麓にあった湖の名で、万葉の時代はまだ富士山麓には、今でいう河口湖と本栖湖、そしてこの石花の海の三湖しかなく、その後貞観6(864)年の富士山の大噴火で、山中湖が生まれ、石花の海が、現在の西湖、精進湖に分断され、富士五湖となった。



ところで、歌の最後の1行、左注を見てほしい。「右の一首は……類を以ちてここに載す」とあるが、この「右の一首」が、これまで議論的となってきた。「右の一首」が、最後の反歌だけを指すのか、或いは、長歌と反歌の3首を指すのか、それによって、前2首の作者が違う歌人になってしまうが、ここでは、ほぼ定説になっている、3首とも虫麻呂の作として話を進める。それで、この虫麻呂の歌の前に載っているのが、歌聖山部赤人の「不尽山」の歌の長歌と反歌である。その反歌が、本稿のその6「万葉秀歌ランキング」で、ベストワンとなった「田子の浦」の歌である。この赤人の歌に類するので、虫麻呂の歌もここに載せる、というのである。虫麻呂と赤人は、「手児奈の歌」だけではなく、「不尽山の歌」も、ここではあたかもセットのように並んで万葉集に収められている。さらには、一部同じ文言を用いてそれぞれ歌っているのだ。虫麻呂の長歌と反歌の2か所に出てくる「天雲も い行きはばかり」という表現を覚えておいてほしい。この文言が互いの歌の中で符合している。

「符合」というと、ある情景が浮かび上がってくる。歌だけではなく、本人同士の「符合」、つまり、歌では「対」をなした2人のファンタジスタは、当時互いに出会い「対面」していたのか？もし出会って「対話」していたとしたら、どのようなことを語り合ったのだろうか？これもまた、興味深い万葉ファンタジアの1つである。

今回は、赤人の「不尽山」の歌を取り上げるが、この歌を追っているうちに、思いがけないことに、驚くべき赤人ナウな話に遭遇することになる。赤人は上総国の生まれで、その墓も今の千葉にある？……そして、「田子の浦」も千葉？……以下は、次回のお楽しみ。

